

## 九州大学附属図書館蔵『さころも』解題と翻刻(一)

閻, 紹婕

九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

張, 愚

九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1518337>

---

出版情報 : 文献探究. 53, pp.41-55, 2015-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 九州大学附属図書館蔵『さころも』解題と翻刻(一)

## 解題

九州大学附属図書館蔵『さころも』(以下は九大本と称す)は、細川文庫旧蔵の一本である。本書は「九州大学図書館蔵細川文庫目録」(『語文研究』八、昭和三四年)によつてはじめて紹介され、またその画像データは、九州大学附属図書館ホームページの貴重資料紹介に公開されており<sup>(注二)</sup>、書誌情報などの解説も付されている。その解説を例示すると次の通りである。

請求番号 さころも(細川文庫本) 545/サ/5

巻冊 写本、八帖

書型 箱入、列帖装、枱型

寸法 縦約一七糎、横約一八糎

外題 各巻とも表紙中央に題簽を付し、「さころも」と記す。

料紙 楮紙

書写年代 江戸初期写、異本

また、写本を収めた箱には極書が添えられている。そこに記された各冊の冒頭と書写者を挙げる。

閻 紹 婕 ・ 張 愚

第一冊 「しよねむの春を」(巻一冒頭) 松殿道基公

第二冊 「かのおすかいは」(巻一後半) 中院殿通純卿

第三冊 「物おもひのはなのみ」(巻二冒頭) 飛鳥井殿雅章卿

第四冊 「ありしねざめの」(巻二後半) 東園殿基賢卿

第五冊 「み山のさとのさびしさは」(巻三冒頭) 大覺寺殿空性親王

第六冊 「としたちかへり」(巻三後半) 實相院殿義尊大僧正

第七冊 「まこと院の女御は」(巻四前半) 持明院殿基定卿

第八冊 「この比世のなか」(巻四後半) 日野殿弘資卿

極書の末尾には、

右八冊銘々御真筆無紛者也。外題冷泉殿為綱卿御筆因需證之訖。

元禄乙亥曆 季冬下旬 古筆了珉

光勝(花押) 琴山(印)

とある。

九大本は元禄年間に飛鳥井雅章ら八人によつて分担書写され、その本文は随所に他の伝本と異なる所がある。当時流布した本文に独自の改変を加えた痕跡も見られ、近世期の混合本文と指摘されている。このような独自の本文を有する九大本は、他の諸本に比してやや特殊な

性格を有することで注目に値する。

また、『狭衣物語』が平安朝物語の中で最も異本の多い作品であることは周知の通りである。それに関する主な先行研究としては、中田剛直著『校本狭衣物語（巻一〜巻三）』（昭和五一〜五五年・桜楓社）と三谷栄一著『狭衣物語の研究（伝本系統論編）』（平成一二年・笠間書院）がある。両氏は、諸本間に見られる夥しい本文異同を整理し、現存の『狭衣物語』を大きく三系統（巻一は四系統）<sup>（注二）</sup>に分類している。両氏の分類方法が、これまでの『狭衣物語』の研究に大きな影響を与えたことは、疑う余地がない。ただし、近年片岡利博氏は、『異文の愉悅 狭衣物語本文研究』（二〇一三年・笠間書院）において、

『狭衣物語』諸伝本は、流布本系統と、それと対立する異本系統の二系統本文に還元されるべきだと指摘し、さらに半世紀以上にわたり学界で無批判に珍重されてきた第一系統の代表本文・深川本が、平安末期までに後人の手によって作られた合成本文である可能性が高く、他の伝本と同じく流布本系本文と異本系本文を合成したものにすぎないと主張している。

当該九大本は、『校本狭衣物語』には採られず、論考も極めて少ない。部分的に触れた論考を除けば、九大本に関する論考は、①森下純昭氏「『狭衣物語』伝来の一側面―細川本からの照射」（岐阜大学『国語国文学』第二〇号 一九九一年）、②長谷川佳男氏「或る異本の様態―九州大学付属図書館文庫本『狭衣物語』」（『論叢狭衣物語四 本文の様相』新典社、平成一五年）の二篇にとどまる。

前述した三系統説に従うなら、九大本は他のどの伝本とも異なり、どの系統にも入れようがない異本となる。比較的書写年代の新しい九大本は末流に位置するため、これまでの研究では無視されてきた。

しかし、九大本は、散逸した異本の面影が残っている可能性もあり、貴重であるとも指摘されている。例えば、「すゑのよもちぎりやはするくれたけのうはばのゆきをなにしたのむらむ」（『物語百番歌合』二八『風葉和歌集』冬・四三六）という和歌は、『物語百番歌合』と『風葉和歌集』で一致し、『狭衣物語』（巻二）においては、九大本が一字違いで『物語百番歌合』と同一和歌を持つている唯一の本文であり、他の伝本とは大きく異なる<sup>（注三）</sup>。このような用例は僅かではあるが、右記の和歌は、九大本の本文が『狭衣物語』伝来史上、鎌倉初期の本文の面影を伝えており、一定の資料的価値を有することを示している<sup>（注四）</sup>。

また、前述の片岡氏の著書によれば、九大本と慈鎮本は『校本狭衣物語』に収録された諸伝本とは大きく異なり、名実ともに異本と呼ぶにふさわしい用例も見られる<sup>（注五）</sup>。しかも、九大本は慈鎮本より意味が通りやすく、優れているとされている。

紙幅の都合上、本稿では第一冊の二五丁・才までを翻刻し、残りはいは次回以降に譲ることとする。

## 注

（注一） 本稿執筆時（平成二七年二月現在） <http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/411732?hit=3&caller=xc-search>

（注二） 『狭衣物語』の本文系統に関して、片岡利博氏著『異文の愉悅 狭衣物語本文研究』（笠間書院 二〇一三年 三頁）では次のように整理している。

系統	第一系統	第二系統	第三系統	第四系統
第一類本	深川本・内閣本 第一類本第一種	深川本・内閣本 第一類本第一種	深川本・内閣本 第一類本第一種	蓮空本 第一類本第一種
第二類本	為家本 第二類本	大島本・高野本 第二類本	大島本・京大本 第二類本	大島本・為秀本 第二類本
流布本	三糸西本 第一類本第二種	流布本 第一類本第二種	流布本 第一類本第二種	第一類本第二種
第一類本第二種				

(注三)

ゆきのあしたいくよへぬらむたけのはにと侍りし御かへり齋院  
すゑのよもちぎりやはするくれたけのうはゞのゆきをなにしたの  
むらむ — 『物語百番歌合』二八番 右  
すゑのよもちぎりやはするくれたけのうはゞのゆきをなにしたの  
むらむ — 『風葉和歌集』冬・四三六  
すゑのよの契りやはするくれ竹のうは葉の雪をなにしたのむらん  
イ本二  
すゑのよを何たのむらん竹の葉にかゝれる雪のきえもはてなで  
— 九大本 (傍線で示したのは『物語百番歌合』『風葉  
和歌集』と異なる箇所である)  
ゆくすゑもたのみやはするたけのはにかゝれるゆきのいくよと  
もなし — 深川本・内閣本  
ゆくすゑもたのみやはするたけのはにかゝれるゆきのいくよと  
もなく — 為家本  
行すゑをちぎりやはするくれ竹のかりはの雪をなにしたのむらん

いま一の本

末のよもなにしたのむらん竹のはにかゝれる雪のきえもはてなで

— 蓮空本

末のよもなにしたのむらん竹のはにかゝれる雪のきえもはてなで

— 流布本

(注四) 詳しくは、前述の森下氏論文を参照。

(注五) 前述の片岡氏著書一〇八頁を参照。なお、九大本の該当箇所は第六帖四

オウである。

(文責 閻)

### 翻刻

#### 凡例

- 一、九州大学附属図書館蔵『さころも』を底本とした。
- 一、底本の表記通りに翻刻することに努め、漢字、仮名、ミセケチ  
などもすべて原文のままとした。誤謬、脱落と考えられる箇所  
も底本の通りにした。
- 一、各面の配字配行を忠実に再現し、各行末にカギ括弧を付ける。  
表裏は「オ・ウ」と表示した。
- 1 しよねむの春をおしめとゝ
- 2 まらぬものなりければやよひ
- 3 の廿日あまりになりぬ御前の

4 木たちなにとなくあをみわたり  
5 てこくらき中になかしまの藤  
6 は松にとしもおもはずさきか  
7 かりてやま時鳥まちかほなる池  
8 のみきはのやえ山ふきはゐて  
9 のわたりにとならすみえわた  
10 さるゝをひかる源氏の身もな  
11 けつへきとの給けむもかくや」(二・オ)

1 なむとひとりみ給もあかねは  
2 さふらひわらはのをかしけなる  
3 して一枝おらせ給て源氏の  
4 宮の御方へもちてまいり給へれ  
5 は御前には中納言少中将など  
6 やうの人／＼さふらひて宮は  
7 御てならひゑなとかきすさみて  
8 そひふさせ給えるこの花のゆ  
9 ふりへたそつねよりもおかしう  
10 みえさふらへ春宮のさかりに  
11 はかならすみせよとの給は」(二・ウ)

1 するものをいかで御らむせさせ  
2 てしかなとてうちおかせ給に  
3 みやすこしをさきあかり給てみ  
4 おせ給えるまみかしらつき

5 のうつくしきははなのに  
6 ほひふちのしないにもこよなう  
7 まさりてみえ給れいのむねう  
8 ちさききて花にはめもとゝ  
9 まらすつく／＼とまほられ給  
10 へるに花こそはなとゝりわき  
11 山ふきをてまさくりにし給」(二・オ)

1 御てつきいとゝもてはやされ  
2 ていひしらすうつくしけな  
3 るを人めもしらす我身にひ  
4 きにはまほしうおほゆる  
5 さまにいひしらぬやくちな  
6 しにしもさきそめにけむち  
7 きりそくちおしき心の中い  
8 かにくるしかるらむとの給へは  
9 中納言さるはことのはしけう  
10 侍るめるをといふ  
11 いかにせむいはぬ色なる花な」(二・ウ)

1 れは心の中をしる人もなしと  
2 おもひつゝけ給えとけに人  
3 もしらすりけりたつをたま  
4 きのとるけかれてもやのはしら  
5 によりぬ給える御かたちはな

6 をたくひなくみえ給によし  
7 なきことによりさはかりめてた  
8 き御ありさまをむろのやしま  
9 とのみおもひこかれ給さまそ  
10 いと心くるしきやさるはこの  
11 けふりのたゝすまひしらせ」(三・才)

1 たてまつらむにをよひなくい  
2 かならんたよりにてなむとかほ  
3 しわつらふにはあらすたゝ  
4 ふたはよりつゆはかりへたて  
5 なくをひたち給ておやたち  
6 をはしめてよその人／＼御門  
7 春宮ひとついもせとおほし  
8 たるに我は我とかゝる心のつ  
9 きそめておもひわひほのめか  
10 してもかひなかるへき物か  
11 らあはれにおもひかはし給」(三・ウ)

1 えにおもはすなる心のありける  
2 よとおほしうとまれこそせめ  
3 大殿宮なんともたくひなき  
4 こゝろさしといひなからこの  
5 御ことをさらはさてあれなと  
6 もよもさかせ給はしよの人

7 のきゝおもはむことよゆかし  
8 けなくけしからすもあるへ  
9 きかなとさまかうさまに世の  
10 もときになりぬへければある  
11 ましきことにふかくおほしと  
「(四・才)

1 るにしもいともあやにくに心  
2 はくたけまさりつゝついに  
3 はいかにか身をなしはてむと  
4 心ほそきおりかちなりいまは  
5 しめたることにはあらねと  
6 猶世中にさらてありぬへかり  
7 けることよあまりよろつすく  
8 れ給えらむ女の御あたりに  
9 まことの御せうとならさらん  
10 おとこをはいみしくともむ  
11 つましうをゝしたて給ま」(四・ウ)

1 しきわさにや此ころほりか  
2 はのおとゝときこえて関白し  
3 給は一条院たうたいなとのひ  
4 とつ后はらの二のみこそかし  
5 はゝ后もうちつゝき御門の御  
6 すちにていつかたにつけても  
7 をしなへてをなし大臣ときこえ

8 さすれといとかたしけなき  
9 御身のほとなれとなにのつみ  
10 にかたゝ人になり給にけれと  
11 故院の御ゆいこんのまゝに内」(五・オ)

1 わたりの御ことはたゝこの御  
2 こゝろのまゝに世をまかせ  
3 きこえ給て御中もいとあら  
4 まほしきみありさまともなり  
5 二条ほりかはのわたりを四丁  
6 つきこめてみかたにつくり  
7 みからせ給て北方三人をそす  
8 ませたてまつらせ給ほりかは  
9 一丁にはやかて御ゆかりはなれぬ  
10 せんたいの御いもうと齋宮を  
11 はします東院にはたゝいま」(五・ウ)

1 のおほきおとゝときこえさする  
2 御女一条の院の後の宮の御を  
3 とゝ春宮の御をはよゝのおほ  
4 えうちゝの御ありさまはな  
5 やかにたのもしけなぐりいま一  
6 所は式部卿ときこえし御女  
7 その中にこゝろほそきみあり  
8 さまなりぬへけれと女君世にし

9 らすめてたきひとりうみたて  
10 まつり給て中宮ときこえ  
11 さす今上一の宮さへいてをはし」(六・オ)

1 ましたる御いきをひなかゝ  
2 猶中にすくれてめてたく  
3 ゆくすゑたのもしき御あり  
4 さまなめりかゝる中にも齋宮  
5 はおやさまにあつかりきこえ  
6 させ給てしかはやむことなく  
7 かたしけなき御かたにも御かた  
8 ち心さまもなへてならす思ひき  
9 こえさせ給へるにわかくすくれ  
10 て此世のものともみえ給はぬ  
11 おとこ君たゝ一人物し給をい  
12 かてかは世のつねにおもひきこえ」(六・ウ)

1 させ給はん千人の中にもいと  
2 かしこからむはおやの御めにも  
3 いかゝはおほしかしつかさらむ  
4 此ころ御とし廿にいま二はかり  
5 やたり給はさらむと二位中将と  
6 そきこえさするなへての人に  
7 てたにかはかりにては中納言に  
8 てもなり給へきそかしされと

11 10 9  
この御ありさまの此世物とも  
みえすめてたきによろつおほ  
しをちたるなめりこれを」(七・オ)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11  
たには宮はちこのやうなる  
ものをとあやふけにいまし  
きまでおほしめしためれとを  
しなへての殿上人にてましらひ  
たまはむか猶いと心くるしき  
に内のせちなさせ給えるな  
るへし御門をはしめたてまつ  
りて世中の人たかきもくた  
れるも此御かほかたち身のさ  
い御としのほにもすきてまし  
てさかりにねひとのほり」(七・ウ)

1 2 3 4 5 6 7 8 9  
給はむゆくすゑをゆかしき  
なをあまりあるわさかなとおと  
ろきあさみ此世のひかりのため  
にあみた佛のかたきけふをな  
し給てかりそめにいて給えるに  
やとまであめのしたのめてくさ  
になり給えるいひしらぬしつ  
のおなんともみたてまつりては  
我身のうれへもみなわすら

11 10  
れておもふことなき心ちしつゝ  
あさましけなるかほのゆくゑ」(八・オ)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11  
もしらすゑみひろこりてある  
はをかみたてまつり涙をなか  
せは大殿堂などはあめ風のあ  
らきにもあやうく月のひかり  
にあたり給も光のあさやかな  
るにはいましおほふはかりの  
袖のいとまなくあまりこちた  
き御もてなしをうきいたのま  
れぬへくくるしきをいかてか  
さのみもしたかひきこえ給はむ  
よるなともいつくとなくま」(八・ウ)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10  
きれ給よなくは二所なからう  
ちもまとろますうしろめたな  
かりきこえさせ給されとむかひ  
きこえさせ給ぬれば御心のまゝ  
にもえいさめきこえ給はてたゝ  
うちゑみてみたてまつり給える  
けしきともいひしらすあは  
れけなりみくるしくある  
ましき事をしいて給えりとも  
此御心にすこしもくるしくおほ



11 しらぬへからむことをはたかえ」(九・オ)

11 せいしきこえ給へきにもあらず  
10 ゆめにもあはれをかけ給はむ人  
9 をはいひしらぬしつのおなりとも  
8 たまのうてなにもはくゝまんと  
7 おほしをきつれといかなるにか  
6 御身の程よりもいといたうしつ  
5 まりて此世はかりそめにあち  
4 きなきものとおほしてありてふ  
3 人はしらまほしけにもおほし  
2 たらすおほろけならぬむことに御  
1 めもとゝめ給へきにもあらねは」(九・ウ)

11 すこしものすさましく心やま  
10 しきをくちをしく心もとな  
9 き物におもひきこゆる人ゝも  
8 あるへしまれゝ一くたりも  
7 かきなかし給える水くきのな  
6 かれをはめつらしうをきか  
5 たき物におもふかはかりのゆく  
4 ての一事をもみにしみてをか  
3 しいみしと心にしみてまし  
2 てちかき程の御けはひなんと  
1 ちよを一よにもなさまほしう」(二〇・オ)

1 とりのねつらきあか月のわか

11 れきえかへりいりつくいりぬるい  
10 そのなけきなかゝなるに心を  
9 つくす人ゝたかきものをつ  
8 からいかてかはなからんそれに  
7 つけてもいとゝうらみ所なく  
6 すさましきことのみまさり給  
5 へかめれといとなへてならぬわ  
4 たりにはなたらかなさけ  
3 をもみせ給ておりにつけたる  
2 花紅葉霜雪雨風のあらき」(二〇・ウ)

11 まきれにもしあはれまさり  
10 ぬへきたくれあかつきのしき  
9 のはかせにつけておもひかけ  
8 すをとつれ給おりゝもなかゝ  
7 いなふちのたきにさはきまさり  
6 つゝはたのいけふりに心をつ  
5 くし給なめりかしきこそまめ  
4 たち給へと猶このあくせには  
3 むまれ給えはにやたゝひき  
2 すきたまふみちのたよりにも  
1 すこしゆえつきたる山かつの」(二一・オ)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
かきをのなてしこにはをの  
つからめとまらぬにしもあら  
ぬ程にをのつからとをなつか  
しみたひねし給おりもある  
とかやいかなるおりにか大十経  
かや御すとの給えることをお  
ほしいて車のすたれをうち  
をろしつれとそはのひろら  
かにあきたるをは猶たて給はぬ  
こそあんめれさたにかていかてか  
をはせさらんおとこといふ物は」(一一・ウ)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
あやしきたに身の程しら  
す人に心をつくるなめりか  
しひかりかゝやき給はさる  
ものにて御こゝろはへまことし  
きさえなむとはもろこしにや  
たくひあらん此世にはいまも  
むかしもためしなくそ物し  
給けるてかき給えるもいにし  
へのなたかゝりけるあとには  
とせふれとかはらさりけるに  
みあはせ給えはまことに時よ」(一二・オ)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2  
しうゝつくしきさまはこ  
よなくかきまし給えりとそ  
さためられ給えりける又  
琴笛の音につけても雲井  
をひゝかし此世のほかまですみ  
のほりてあめつちもうこかし  
給えるへきにおやたちはゆゝし  
うおほしてなに事もあなち  
にこのみせさせたてまつり給は  
ねは我心ことにこゝろとゝめて人」(一二・ウ)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
のみゝならさすなとあれはむし  
むにもすさましき人さまに  
やとをしはかられ給えとはかな  
き御ことは御けしきにうちみ  
たてまつるより我身のうれ  
えもわすれものおもはるゝ心  
地うちゑまれあひきやうつき  
給えるさまそたくひなかり  
けるすへてなに事にもよろ  
ついひつゝくれはためしなき  
御ありさまを世の人のことく」(一三・オ)

2 1  
さにきこえさすめれと大殿な  
とはあまりゆゝしうあめわ

3 かみこのあまくたり給にや  
4 けふやあまのは衣むかえに  
5 え給はむとあやうくしつ心  
6 なき御心のうちともなり源氏  
7 の宮ときこえさするはせん  
8 たいの御すゑのよに中納言の御  
9 息所にきこえし御はらから  
10 にうつくしき女宮むまれ  
11 給えりしをいまさらの御ほ  
「(二三・ウ)

1 たしと心くるしうおほし  
2 はくゝみしほとに宮三はかり  
3 になり給しに院も御息所も  
4 うちつゝきかくれさせ給にし  
5 かはいと心くるしうて齋宮む  
6 かへとりきこえさせ給て中將の  
7 御をなし心におもひかしつき  
8 きこえ給殿もまことの御女よ  
9 りはやむことなきかたそえて  
10 おもひかしつきゝこえさせ給え  
11 り十によついつゝはかりあまる  
「(二四・オ)

1 程の御かたちありさまみたて  
2 まつらん人いかなるものゝふ  
3 なりともやはらくこゝろか

4 ならすつきぬへきを左中將  
5 の御こゝろの中もことはり  
6 そかししはしはなすらひ<sup>え</sup>なる  
7 人さりともありなむとたのま  
8 れ給えによしかたかかくれ  
9 みのをこそえ給はねとをのつ  
10 からだかきもくたするもた  
11 つねよりつゝいたゝのはしは  
「(二四・ウ)

1 くつるれとけちかき程に  
2 こそあらねそたちきゝかいは  
3 みなとはかくこく御心にいりた  
4 るまゝにおほつかなきはすくな  
5 けれどこの御かたちありさま  
6 にならふはありかたきにこそ  
7 とおほさるゝにいとゝ人し<sup>え</sup>れ  
8 ぬ心のうちはおもひこかれ給  
9 さまいとをしうたまとやつゐに  
10 なりはてむとみゆるをさすかに  
11 しのひまきはし給にはれ<sup>く</sup>  
「(二五・オ)

1 しからすむすほゝれ給御けし  
2 きをことなひ給まゝに人の御  
3 すくせ忍もちすりたれもえ  
4 しり給はぬなるへしおほき

5 おとゝの御方にそいかにもく  
6 かやうの人もおはせていとつれ  
7 つれにをほさるゝまゝにさる  
8 へからん人のむすめもかなあつかり  
9 かしつかむとあけくれうら  
10 やみ給める源氏の宮の御かた  
11 ちかくなたかくて春宮の「(二五・ウ)

1 ゆかしう思ひきこえさせ給える  
2 をそれこそつみのことゝおほ  
3 したり内のうゑもむかしの御  
4 ゆいイゆかりこんおほしわすれすあはれに  
5 思つきこえさせ給なからもおほつ  
6 かなくてすきさせ給にさやうに  
7 て内すみもし給へかしとおとゝ  
8 にもきこえさせをとろかさせ  
9 給えりけりされといとゝしき  
10 御ありさまをいますこしねひ  
11 とゝのほり給てこそなんとおほ  
「(二六・オ)

1 ろけならすおほしをきつる  
2 御いそきなるへしかくいふ程  
3 に卯月もすきて五月の四日に  
4 もなりにけりゆふつかた中将の  
5 君内よりまかて給道すから

6 み給へはあやめひきさけぬし  
7 つのおなくいきちかひもてあ  
8 つかふさまなんともけにかはかり  
9 ふかゝりけるとをちのさとの  
10 恋ならんとみゆるあしもとゝ  
11 もの物わひしけなるいかにく「(二六・ウ)

1 るしからんとめとまり給て  
2 うきしつみねのみなかるゝあ  
3 やめ草かゝる恋ちと人はし  
4 らぬにとそいはれ給うてなの  
5 のきはかけみ給はをかしう  
6 のみおほさるゝを御車のさきに  
7 かほなともみえぬまてうつもれ  
8 てゆきもやらぬを御隨身とも  
9 のをとろ／＼してこゝにをひ  
10 とゝめらせて身のならんやう  
11 もしらすかゝまりたるを御らん  
「(二七・オ)

1 してさはかりくるしけなる  
2 をかくいふとせひせさせ給えと  
3 ならひさふらへはかはかりの物は  
4 なにかくるしとおもひさふらは  
5 むと申を恋のもちふは我御  
6 身にならひ給へは心うくもい

7 ふのかなときゝ給おほきなる  
8 もちぬさきもつまことにふ  
9 きさはくも車よりのそきつゝ  
10 すき給にいひしらすちあさく  
11 あやしき家ともにたゝ一すち  
「(二七・ウ)

1 つゝをきわたすをあはれ  
2 のさまやなにの人まねとも  
3 すらんとみつゝすき給まゝ  
4 に笛をふき給つゝ物みよりさし  
5 いて給えるゆふはへまことにひか  
6 るやうなるをはしとみにあつ  
7 まりたちてみたてまつる人ゝ  
8 ありけり御車なといまはをと  
9 なしくなり給へと御とものさ  
10 うしき隨身などはいとわか  
11 をかしけになへてならすみゆ  
「(二八・オ)

1 るをあれちか身にてたにあら  
2 はやおもふことなけるもの  
3 かなとわかき人ゝめてまとひ  
4 てすき給るもわかねほのきの  
5 あやめを一すちひきをとして  
6 物いさゝかゝきつけてはした  
7 ものゝをかしきしてをひた

8 てまつるをおくれてはしる  
9 隨身にとらせてかへるをいつ  
10 くよりそやかてまいらせ給へ  
11 とてとらえてまいりたるをみ  
「(二八・ウ)

1 たまへは  
2 しらぬまのあやめはそれと見  
3 えね+ともよもきか門はすきすも  
4 あらなんとそかきたるいかなるす  
5 き物ならんとほゝえみてつかひ  
6 にとはせ給えといはんやは心と  
7 き隨身そのわたりにふてかり  
8 めてまいりたりしてふところ  
9 かみにかたかんなに  
10 みもわかつてすきにける哉をし  
11 なへてのきのあやめのひましなけ  
「(二九・オ)

1 れはいまわさとまいらんといはせ  
2 給てわらはのいらん所みよとの給  
3 へははしとみなむとあけわた  
4 してすきかけあまたみえしと  
5 申せはなに人なりとみしり  
6 つるにやとはかりおほせと  
7 さやうのうちつけさうな  
8 むとは御心にいらてあるまし

11 10 9  
きことをそいかなることをも  
御こゝろにとめ給ぬるまたの  
日さるへき所へ御文たて」 (二九・ウ)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11  
まつり給色へのかみはたへ  
などなへてならぬあまたとり  
ちらしてすこしこまやかにを  
しすりつゝかき給御てはな  
とかはずこし物思ひしらん  
人のいたつらにかへさんとみゆ  
るあなとそなへての人のくち  
つきにまさりてをかしとも  
みえぬはまねひゝかめたるに  
や左の大將の女せんようてむ  
ときこえて春宮にいみしく」 (二〇・オ)

1 2 3 4 5 6 7 8 9  
ときめき給をいかなる風の  
たよりにかほのみ給てけり  
されいかてかはたれも思ふ  
さまにもあらずおほろけな  
らては御文などたにかよふ  
事かたくそありけるあま  
りまちとをになりたるも恋  
しくおもひそきこえて  
恋わたるたもといつもかはか

10  
ぬにけふはあやめのねさへなか」 (二〇・ウ)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11  
れて一条院の姫宮の御けは  
ひほのかなりしかはにやなへて  
ならぬ心地せしをいかて御かた  
ちなんとようみたてまつらむと  
心にかりて小將の命婦のもと  
にれいのこまかにて中に  
思ひつゝいはかきぬまのあや  
め草みこもりなからくちはて  
ねとやなとやうにてあまたあ  
むめれとをなしすぢならぬ  
はとゝめつかやうにおりに」 (二一・オ)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10  
つけたることの葉などはちら  
し給えとこゝろの中には  
いつまでかとのみ此世はかり  
そめにもすさましくおほ  
さるゝちやうしにくろむまで  
そゝきたる御ひとえにくれな  
ゐのはかまをき給てつらつ  
えつき給て池のしやうふ心  
地よけにしけりたるをなか  
めやり給て一定佛三すとす」 (二一・ウ)

1 1 あり給御こゑはたくひなし  
2 2 ありつる御かへりはいつれもをか  
3 3 しきなかにせんようてんの御ては  
4 4 まことにおかしけに

5 5 うきにのみしつむみくつと  
6 6 なりはてゝけふはあやめのね  
7 7 たになかれすとあるけしき  
8 8 なんともなひきに給へる心地  
9 9 してらうたけにあはれあ  
10 10 さからねはずこし涙くまれ給  
11 11 ぬそのよさはもしさりぬ」 (二二・オ)

1 1 へきひまもやとうちわたりに  
2 2 たちいて給にいとゝめしさえ  
3 3 あれはまいり給まつ殿の御所  
4 4 にまいり給へればけふはみえ  
5 5 たまはさりければいかにや  
6 6 めつらしきにほひそひ給え  
7 7 る心地してうちゑみてそつ  
8 8 くくゝとまほらせ給内よりめ  
9 9 しあれはまいりけを宮の御  
10 10 方に御せうそくやと申給え  
11 11 はけされいならぬ御さまにな

1 1 むきゝまいらせつればまいら

「 (二二・ウ)

2 2 むとしつるをかせにや心地も  
3 3 なやましくてくらし侍ぬる  
4 4 いまつとめてのほとにためらひて  
5 5 まいらむあつきほとはしいてゝ  
6 6 やすみ給えかしとおもふをれ  
7 7 いの御いとまかありかたわらむな  
8 8 とそかたらひきこえ給へは御い  
9 9 らえしてたち給ぬまたしき  
10 10 にあつき所せきとしかななし  
11 11 につねにめすらんとつふやき」 (二三・オ)

1 1 給をはゝ宮くるしくおほえ  
2 2 たまはゝなにかはまいり給なと  
3 3 心くるしけにみをくりき  
4 4 こえさせ給さうひのくれなゐ  
5 5 の御ひとへに御なをしいとき  
6 6 かなてしこのふせんれうの  
7 7 御さしぬき給える御やうたい  
8 8 こしつきさしぬきのすそまで  
9 9 わりくゝとなまめかしうきな  
10 10 し給えり物ゝ色などなへて  
11 11 きるをなしいるともみぬえな

「 (二三・ウ)

1 1 とかくあまりゆゝしうをひ  
2 2 なるらむと涙うけてせちにみ

3 たてまつりをくらせ給御け  
 4 しきを御まへなる人／＼ことわり  
 5 そかしけにあまりゆゝしきま  
 6 てなときこえさす内にはわさと  
 7 せちへなとなきよのつれ／＼にお  
 8 ほしめさるゝにあま雲さへたち  
 9 わたり物むつかしきなくさめに  
 10 春宮わたらせ給て御物語など  
 11 あるなりけり御前のひろひさ」 (二四・オ)

1 しにおほきおとゝ権中納言そ  
 2 つの中将左兵衛のかみ宰相の  
 3 中将などやうのかんたちめあ  
 4 またさふらひ給二位の中将の  
 5 まいり給はねはいとゝしきさ  
 6 みたれのそらのひかりなき心  
 7 地してめすなりけりまち悦給  
 8 てこよひのはへにはさふらふ  
 9 かきりの御さちともをてのかき  
 10 りをしまて一つゝ心みむと  
 11 おもふを春宮もけうあること」 (二四・ウ)

1 との給てさま／＼の御ことゝも  
 2 たてまつりわたす中納言琵琶  
 3 兵衛督に琴左大将の宰相の中

4 将に和琴中務宮笙源中将よ  
 5 こ笛給はすたゝいまのなたかき  
 6 しやうすともなるへしをの／＼  
 7 こよひの物ゝねともひとりつゝ  
 8 きかせよとおほせらるゝをた  
 9 れもひとつにかきあはせてこ  
 10 そあやしさもまきはしつ」 (二五・オ)

〈付記〉

本稿をなすにあたって、九州大学附属図書館より、資料の閲覧及び  
 翻刻掲載の御許可を賜りました。記して心より御礼申し上げます。

(えん しようしよう・本学大学院博士後期課程)  
 (ちようぐ・本学大学院博士後期課程)